

気候変動適応研究プログラム

委員会の主要意見		主要意見に対する国環研の考え方
現状についての評価・質問など	自然生態系、農業、健康影響など多分野にわたる影響評価が進み、67 作物の適応時期提示や窒素肥料とオゾン影響評価など、政策・実装に資する重要成果が得られている。PJ 間連携や自治体・国際機関との協働を通じ、適応策立案やモニタリングの基盤研究が着実に進展している。	ご評価いただきありがとうございます。次期中長期においても多くの有用な研究成果を公表できるように努力いたします。
	EbA 研究や適応緊急性指標の提案など、観測・予測・適応戦略を統合した実践的かつ先導的な成果が創出されている。	ご評価いただきありがとうございます。PJ1 の EbA 研究は次期中長期において PG2（自然を活用した解決策（NbS）の実装と展開に向けた研究プログラム）として取り組む予定です。
	窒素肥料による水稻のオゾン感受性効果について説明がほしい。	イネのオゾン感受性とは、イネが気孔を通じて吸収したオゾン吸収量に対して光合成速度や収量の下がりやすさを意味しています。ここでは光合成速度や収量が下がりやすい場合、感受性が高いと言っています。このオゾン感受性ですが作物・品種が同じであれば同じだとこれまで考えられてきましたが、肥料の多寡によってオゾン感受性が異なること(肥料が少ないと感受性が高い)が適応 PG1 の実験より明らかにしました。ここではこの肥料の多寡によってオゾン感受性が異なることを「肥料の水稻のオゾン感受性効果」と呼んでいます。
今後への期待など	「適応の緊急性評価手法の開発」は有効な適応策として期待されるが、今後実用化のためには不確実性の一層の削減が期待される。	「適応の緊急性評価手法の開発」に関しては、次期中長期の適応 PJ において深化させていきたいと思えます。
	LCCAC や他の機関との連携を期待する。	LCCAC や他機関との連携に関しては、支援業務で運営している「気候変動適応に関する研究機関連絡会議」などを活用して効果的な実施を目指したいと思えます。
	適応の時期を具体的にどうすればよいのかについて、もう少しわかりやすい表現があるとよい。	適応の時期を具体的にどのようにすればよいか、次期中長期の重要な課題として取り組んでいきたいと考えております。

気候変動適応研究プログラム

委員会の主要意見		主要意見に対する国環研の考え方
現状についての評価・質問など	第5期を通じ、「メカニズム解明 → 影響評価 → 適応策提案・実装」という統合的研究枠組みが構築され、気候変動適応研究の基盤が確立された点は高く評価される。影響観測やシナリオ分析の拡充、適応緊急性指標の提案、適応効果の一部定量化など、科学的・政策的に重要な成果が創出された。	次期中長期においても数多くの研究性を創出すべく精進してまいります。
今後への期待など	沿岸・海洋生態系に加え、陸域での適応策の検討がさらに進展すると良い。また、これらの成果を今後多様な組織や機関と連携し、政策を含めた対応策につながることを期待する。	次期中長期においても分野研究の適応PJとしてさらに発展させていく所存です。ご指摘いただいた陸域での適応策の検討については、次期中長期のPG2（自然を活用した解決策（NbS）の実装と展開に向けた研究プログラム）と連携して進めてまいります。また、支援業務を通じて複数の組織や機関と連携し、政策を含めた対応策に繋げるよう努力いたします。
	「適応学」の構築に向け、統合的な議論につながる研究計画が次期中期計画機関で展開されることを期待する。	今中長期で検討した「適応学」の骨子を踏まえて、より発展的な研究に取り組んでいくように努力いたします。
	地域依存性を踏まえつつ、個別事例を統合し優先順位付けや合意形成を支援する統合プラットフォームの構築を進めると同時に、観測・緩和・適応を統合した研究展開を推進していただきたい。	アドバイスいただいた「優先順位付けや合意形成を支援する統合的プラットフォームの研究」を次期中長期の分野研究で実施する適応PJや知的研究基盤において取り組んでいく所存です。また、次期中長期においては、研究範囲を広げるとともに、他の研究PG・PJと連携して気候危機への解決に繋げていきたいと考えております。